

氏名：重森 栄美菜  
大学名・学部・学科名：安田女子大学・  
文学部・英語英米文学科  
派遣先国・都市：タイ・バンコク  
派遣期間：28 日間  
日付：2012 年 8 月 14 日～9 月 10 日

## インターン派遣事業報告書（第 12 条関係）

### 1. 受入機関の状況

(1) 現地受入大学名・学部学科名：スィーパトゥム大学・バーンケン本校 国際言語文化研究所 日本語科

(2) 日本語教師数：3 名

(3) クラス数と日本語学習者数：  
JPN331/日本語Ⅰ 60 名 1 クラス  
JPN333/日本語Ⅲ 70 名 2 クラス  
初級日本語特別クラス 20 名 1 クラス  
合計 4 クラス 150 名

### 2. 担当した授業の状況

(1) 実習を担当したクラス：JPN333/日本語Ⅲ・JPN333/日本語Ⅱ

(2) 生徒数：20～25 名

(3) レベル（日本語能力）：初級

(4) 担当した授業の内容

日本語 333 ことばの本：使用教材

1 時間 30 分 3 コマ：担当時間数とコマ数

教案作成・添削・教材準備 6 日間：授業前の準備

3. 授業前の準備に当たってどのような点に注意したか。また、実際に授業を行って思い通りに授業ができたと思うか。よかった点、悪かった点を挙げながら自己評価してください。

自分の担当する文法についての理解をするため、類似表現との違いを見つけ

てから授業の準備に取りかかるようにした。

実際に授業を行うと、思い通りに授業は出来なかった。良かった点は、文字カードの文字を丁寧に書いた点、声の大きさ、生徒一人ひとりの目を見て授業出来た点があげられる。

一方で悪かった点には、板書計画が足りなかった点や絵カードの統一性が無かった点、また教室コントロールができなかった点に加え、学習者からの言葉の引き出し方が悪く、臨機応変に対応出来なかった点、簡単な質問などでの理解度の確認不足などの点が上げられる。全体的に授業準備がまだ足りなかったといえる。授業を終え、文法理解や一番良い例文の提示、事前の綿密な計画がとても大切であると実感した。教科書に書いてあることをそのまま教えるのではなく、もっと学習者自身が考えながら出来る、少しずつレベルを上げながらの授業をしていくべきだった。授業中は、学習者の反応を見て時々確認を入れ、全員が同じ速度でステップを踏めるような授業運びが望ましい。

また、どんな授業も自分自身が楽しい・面白いと思わなければ相手にも伝わらない。発話を引き出すための教材作りは、分かりやすくシンプルなものにする必要があると感じた。今後は楽しい授業をするため、教師からの一方的でない授業を重視し、いろいろな方法を試してみたい。

4. つぎの2つの点で、あなたはどのような貢献ができたと思いますか。行った活動を具体的に記して、自己評価してください。

(1) 学生の日本語力や日本文化に関する知識を向上させる

常に学生との距離が近い部屋で作業をしながらランゲージパートナーで、学生と日本語で簡単な会話をした際、日本でのアルバイトや大学、日本の四季やお菓子、自分の家族などについて話をした。また、絵や写真などを見せながら日本語初級学習者とも交流出来た。

また、日本語文化交流会を企画し、たくさんの学生や先生方を呼ぶことが出来た。宣伝の一環として、浴衣を着用しビラを配ったり挨拶したりして大学構内を歩き、日本語を勉強したことのない学生も交流会に参加していた。日本語パーティーでは、おにぎりを作ったり、書道をしたり、おみくじや盆踊りなど日本文化交流を企画した。ここでは全体を見て、全員と話をしたり一緒に作業したりと日本語を勉強したことのない学生も同じように楽しめるよう気を配ることが出来た。

(2) 学生の日本語学習に対する意欲を向上させる

授業や部屋を訪れた学生の顔を覚え、大学構内でもこちらから積極的に話しかけて話す機会を作ろうとした。もっと日本語で話したいと毎日のように通っ

てくれる学生や、友人を連れてくる学生も見受けられた。日本語を全く知らない学生にも日本語を教えると言われたり、日本人とタイの学生との通訳をしてくれる学生もいたりした。

また、同じように学生で外国語学習者である私も、タイ語を少しずつ使えるようになることで、学生の刺激になっていたようである。プログラム終盤には、理解できるタイ語も少しだが増え、それを聞いていたタイの学生にも度々驚かれた。そして、自分も日本語をもっと頑張ろう、日本語を少しでも使おうという姿勢がたくさんの学生に見受けられた。お互いに、時には間違いを指摘したり、成長を喜んだり刺激し合うことが出来た。

#### 5. 授業以外の活動状況：

日付	活動内容	実施場所
8月18日	タイ国日本語教育研究会月例会	国際交流基金バンコク日本文化センター日本語部 E 教室(10FSerm-mit Tower, Soi Asoke, Bangkok)
8月23日	他機関の日本語教育の現場視察	サトリーノンタブリー中等学校
8月25・26日	J-education 留学 Fair	シリキットコンベンションセンター
8月30日	他機関で学生との日本語での交流(スライドショーによる発表など)	チャンカセム・ラチャパット大学
8月31日	日本文化交流会	スィーパトゥム大学
9月10日	日本文化交流会	スィーパトゥム大学

上記5の補足として、以下の点について書いてください

・学生との交流活動をしましたか：

サトリーノンタブリー中等学校の視察では、中学生とは、簡単な自己紹介の後、名前当てゲームをし、折り鶴を折りながら交流を図った。高校生とは、自己紹介後、日本語やタイ語を混ぜた伝言ゲームをして交流をした。

また、J-educationに参加し、ステージに出たりブースの手伝いをしたり、高校生を対象としたアンケート調査を行ったり、他大学のブースを回り学生や日本語教師との交流が出来た。

チャンカセム・ラチャパット大学訪問では、大学1年生と4年生を対象としたプレゼンテーションを行った。「広島の大學生の一日」というテーマで写真や動きを交えながら、広島弁を入れて標準語との比較が出来るようにした。また、タイの学生も歌やダンス、タイの伝統的なお菓子を作ってプレゼンをし、文化交流をした。最後には、質問コーナーを設け、お互いに質問し合うことも出来た。

・日本語学科のある他大学を訪問しましたか

チャンカセム・ラチャパット大学を訪問した。4年生は、ビジネスの日本語を勉強中で、敬語を使つての司会やプレゼンを行っていた。司会からプレゼンの内容まですべて学生が企画し、積極的に動いていた。プレゼン終了後には、個別で質問に来る学生も見受けられた。

・上記の活動を通じて何か得るものはありましたか（しなかった人は何故しなかった）について記述してください。

海外での日本語学習者との交流を初めて経験し、自分の話す日本語についても考え直す機会になった。また、言語学習はコミュニケーションを取りたい、もっと相手のことを理解したいという思いから始まるのだと実感した。初めて日本人の学生と話をした学生も多く、自分の振る舞いや話した内容すべてが、日本人として認識されることにもっと自覚を持たなくてはならないと感じた。同時に、仕草や美しい言葉の選び方など、日常生活から気をつけなければならないとも感じた。

この交流会を通して、たくさんの学生と出会ったが、限られた語彙の中でもなるべく明るい言葉、美しい言葉、前向きな言葉をかけるようにした。また、身振り手振りや話すときの表情も回数を重ねるごとに変わっていったと思う。明るい表情や言葉や身振り手振りでコミュニケーションをとることが大事であると実感したことも得たことである。

6. 国際交流基金の支援は、どの程度有意義でしたか？あてはまる項目にチェックしてください。

- |             |                                     |
|-------------|-------------------------------------|
| とても有意義であった  | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 有意義であった     | <input type="checkbox"/>            |
| あまり有意義でなかった | <input type="checkbox"/>            |
| 全く有意義でなかった  | <input type="checkbox"/>            |

上記について、あなたの日本語教育に対する意識や意欲が実習前後でどう変化したかに触れながら、本プログラムへの参加が、どのような点で意義があったか（あるいは意義がなかったか）記述してください。

実習前は、日本語教育とは、日本で生活していくための日本語が中心であるという意識が強かった。しかし、実習でいろいろな日本語学習者や日本語教師の方々と話をし、実際に教壇に立って、そうではない日本語もあると気付いた。加えて、学習者はどのように日本語を学習してきたのか、これからどう学

習していくのかを知っておくことも日本語教師にとって大切であると分かった。授業中のタイ語を用いての文法説明や、学校教育としての日本語学習を視察出来たことは、初めての経験で視野が広がった出来事のひとつである。また、他の日本語教育機関訪問や、イベントへの参加を通して、タイで働く日本語教師の方々に生の声を聞いたことも貴重な経験だった。日本語の授業の頻度や、授業は間接法か直接法か、学習者のレベルの差やそのクラスの性格でも変わってくるのも、海外における日本語教育ならではの感じた。

また、このプログラムへ参加したことで、帰国後の日本語ボランティアなどの活動にも反映出来ることが多くあると思う。それは、文法の考え方や例文、教材準備や教室コントロールといった技術もあるが、新しい活動や教師が面白いと思うものを取り入れていくことだ。例えば、月例会に参加した際、五行歌に出会ったが、これは日本在住の外国人にも評判がいいのではないかと思う。

そして、今回のプログラムは、私は生徒でも教師でも無い立場だったからこそ、どちらのことも客観的に見る事が出来たのだと思う。学生との距離も近く、私自身もタイ語に奮闘したことで学生も日本語学習意欲がわいたように思える。一方で、日本語教師の方々にも各学校での日本語教育の実情を聞くことが出来た。また、どの教師の方にも共通して、仕事のやりがいや、この仕事に対する熱意を感じた。このように、海外でも多くの日本人が日本語教師として活躍していることを知ったことも、このプログラムに参加した意義があったと思う。